曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（九・完）
-第三編その3-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2022-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22527

明治大学教養論集　通巻五六一号（二〇二二・三）一三―四六頁

曲亭馬琴『漢楚賽擬選軍談』翻刻（九・完）――第三編その3――

神田正行

凡例（摘録。詳細は本誌五三九号（平成31年）掲載の、本稿（一）参照）

一、仮名は一部を除いて、現行のひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。

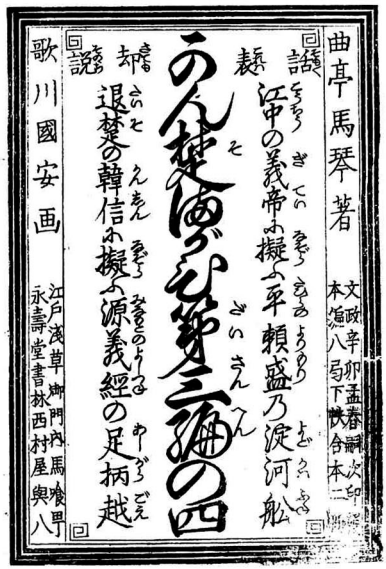
一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除いて省略した。

一、本文には、内容にもとづいて適宜段落・章段を設けた。話題が改まる位置には、内容を示す見出しを、◆印に続けてゴシック体で掲げた。

一、挿絵は本文の近い位置に掲げ、画中の詞書（ことばがき）は同じ頁の下段に翻字した。

一、影印ならびに翻刻の底本は、早稲田大学図書館蔵本（〈13-3056。改装本）である。虫損や着彩、シミなどが目立たぬよう、画像には最低限の修正を施した。

《第四冊　前表紙・同見返し》　※架蔵本による



（前表紙）

曲亭馬琴著

和漢撮合／三編下帙

毎篇八巻合本

歌川国安絵画

漢楚賽擬選軍談　四

（見返し）

文政辛卯孟春嗣次印発

曲亭馬琴著

本編八巻下帙合本二冊

話　江中の義帝に擬ふ　平頼盛の淀河船

表

かん楚まがひ第三編の四

却　退楚の韓信に擬ふ　源義経の足柄越

説

歌川国安画

江戸浅草御門内馬喰町

永寿堂書林西村屋与八

（七）

◆**頼盛、行家に討たれる**

かくて備前守行家【英布】は、山鳥七郎俊義といふ者に、雑兵数多従はして、頼盛卿主従を、都まで送り行きて、「木曽殿の上洛を、相待つべし」と下知せしかば、山鳥七郎心得て、十余人の雑兵らと共に、頼盛主従を守護しつゝ、都を指して急ぎけり。

さる程に行家は、営中に帰り参りて、義仲に申すやう、「某御諚の趣を、頼盛卿に述べ伝へて、早く都へ赴きて、木曽殿を待つべしと、厳かに言ふといへども、はじめはかの人従はず、『我らは思ふ由ありて、頼朝にこそ降参したれ、義仲には従はざりしに、義仲強ひて陣中へ、呼び取りて禁獄したる、それすら非道の行ひなるに、今又都へ遣はして、その身入洛の導人にせんと、言はるゝはいかにぞや。○上へ／○中より我何らの面目ありて、木曽が馬前の塵を追ふて、法皇に見参すべき。思ひも寄らぬこと也』とて、従ふべくもあらざりしを、某いたく責め罵りて、弥平兵衛もろ共に、時を移さず追立て、山鳥七郎俊義に、雑兵らを従はせ、都へ送り遣はしたり」と、こと詳らかに告げしかば、義仲聞つゝ気色変はりて、「そは許しおきがたき、頼盛めが過言なれ。彼は朝敵の頭領なれば、たとひ降参したりとも、許されがたき者なりしに、頭を接がるゝ義仲が、高恩を恩とは思はで、かへつて頼朝を慕ふこと、只これ野心といふべきのみ。さるをこの曲者を、許して都へ遣はさば、我が為には得ならずして、法皇にも摂家大臣にも、讒言せられば身の仇と、次へ（31オ）／ならんこと疑ひなし。今速やかにおし片付けて、後の憂ひを除かずは、後悔そこにたちがたかるべし。早く頼盛主従を、追つかけて討ちとめよ。」と激しき下知に行家は、さらに又一議に及ばず、「受け給はりぬ」と応へつゝ、忙はしく退きて、手の者数多従へて、揉みに揉んでぞ追ふたりける。

○頼盛卿主従は、かゝるべしとは知る由もなく、山鳥七郎らに送られて、早く難波に赴きつゝ、淀川船に乗せられて、伏見の方へ赴く程に、早舟一艘矢を射るごとく、難波の方より漕ぎもて来つ、「その船待て」と呼びかけ

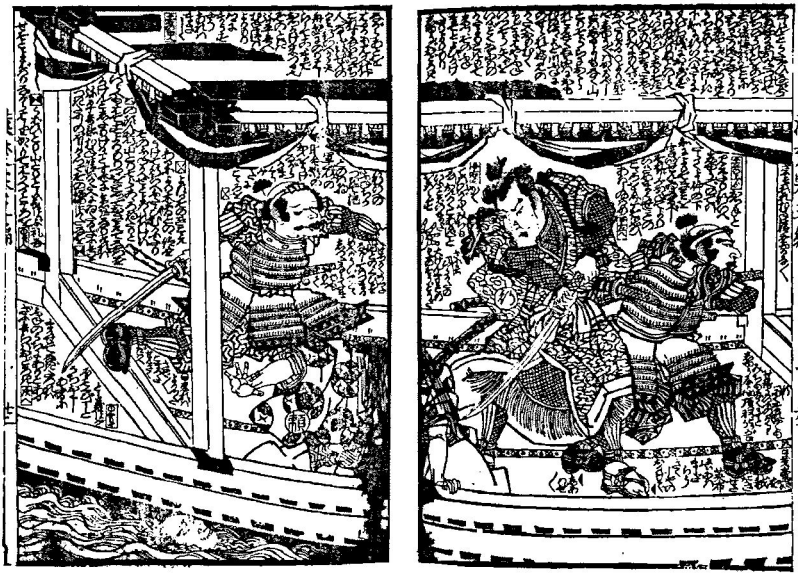
たり。頼盛主従驚きながら、後を遥かに見返れば、これすなはち別人ならず、備前守行家が、異舟に乗り走らして、こゝまで追つかけ来つる也。その時弥平兵衛宗清は、頼盛卿に申すやう、「あれはまさしく▲右の中へ／▲左の上より追手と見えたり。行家主従の為体、義仲の下知によりて、君を害せん為なるべし。某がかねてより、諫め申せしことの心を、今こそ思ひ合はし給はめ。●左へ／●右よりかくては逃るゝ道もなし。御覚悟あるべし」

（31オ　宗清、山鳥七郎を斬る）

と、言ふ言葉いまだ終はらず、行家の舟近付きて、「池殿は将軍の、助命の恩を受けながら、鎌倉方に心を□／□寄する、その聞こえあるにより、木曽殿の仰を受けて、行家再び向かふたり。その船帰せ」と呼ばゝれば、警護の頭人山鳥七郎、「心得たり」と応へも果てず、頼盛卿を取つて抑えて、縄をかけんとしたりける、こと既に急なりければ、弥平兵衛宗清は、かたへにゐたる雑兵を、突き倒しのぼしかゝつて、その腰刀を■／■奪ひ取り、「山鳥七郎俊義、無礼なせそ」と呼ばはりながら、走りかゝりて見返る所を、○印へ／○印より俊義が、細首丁

雑兵「一人じや敵はぬ、皆来い〳〵。

弥（宗清）「俺は漢楚の本文に、見えぬ余計の仕事でも、大和魂作意の専文。こゝもやつぱり船の内、紙中が狭くて一枠に、書れぬ故に先へは出たれど、訳は詳しく次にある、水に溺るゝ山鳥の、譬に洩れぬ七郎俊義、どいつもこいつもなで斬りだぞ。



（31ウ・32オ　行家、頼盛を討つ）

と撃ち落とし、当たるに任せて薙ぎたつれば、船の内にありとある、雑兵らは驚き 次へ （31ウ・32オ）／騒ぎて、おつとり籠めて討たんとす。その隙に頼盛卿は、身を躍らせて水中に、沈まんとし給ひしを、行家早く乗りつけて、勢ひ礫を投ぐるがごとく、此方の船に飛び移り、「水に縁ある池殿でも、水屑にさせては手柄にならず。刀の錆びになり給へ、南無阿弥陀仏」と称名は、ゑせ引導の拝み撃ち、閃かしたる刃の冴えに、憐れむべし頼盛

雑兵「それ宗清をやるな〳〵。

行（行家）「憎まれ役も世話にいふ、逃るゝ道もなく子【▼「（道が）ない」と「泣く子」】と主命。項羽が□／□義帝を弑させた、英布にはましだらう。作者のお陰で▲／▲幸せ〳〵。

雑兵「枚方の大喧嘩この方の騒動だ。折角討つた殿の首を、流してはつまるめへ。かういふことゝ知つたなら、玉でも持つて○／○来ればよかつた。さで〳〵困つた穿鑿だはへ。

卿の、頭は淀川に斬り落とされて、骸は船に残りけり。

弥平兵衛宗清は、今この事のありさまに、前後も分かず斬り靡けて、「主君の仇たる行家を、討つて死なん」と思へども、後より来つる兵らも、乗り移り味方を助けて、喚き叫んで攻めたつれば、宗清義勇の侍なれども、げに一つなる掌は、鳴らすに由なき譬に洩れず、「身一人なるに大敵に、当たりて討ち死にせんは益なし。えうこそあれ」と思案をしつゝ、戦ひながら後ろざまに、身を翻して川水に、たちまちざんぶと落ち入りて、生死も知らずなりにけり。

行家これに驚きて、「あれ逃すな」と呼ばゝるのみ、此ごろの長雨にて、水高く流れ速ければ、続きて飛び入る者もなく、「浮かみ出づるを討たん」とて、只水中に眼を配りて、あちこちとあさりしかども、おし流されてや失せにけん、ありとも見えずなりにけり。

かゝる折から堤の上に、近きほとりの百姓らが、幾人ともなく立集ひて、皆声々に呼ばはるやう、「さても非道の木曽殿かな。頼盛卿は平相国の、弟なれども悪逆なし。古き誼みのあるにより、佐殿に身を寄せて、一旦助けられたるを、又営中に召し取つて、閉ぢ込め置きしのみならず、許して都へ帰さんとて、こゝにて討ちしは表裡の行ひ、武将に似気なき業ならずや。そを一言も諫めはせで、悪を助けて科なき人を、討ち取りたりける行家も、共に逃れぬ天の責め、いかでか久しく栄ゆべき。這奴憎むべし〳〵、たゞやは帰す」と呼ばゝりて、船をのぞんで打つ礫に、雑兵らは鼻柱を、打たれて鼻血を流すもあり。「こはそもいかに」と驚き騒げば、行家も亦驚き怒りて、「物にや狂ふ愚民ども、一人も余さず搦め▲右の下へ／▲左の上より捕らせん。船を着けよ」と息巻けども、堤は高く流れは速し。乱杭・蛇籠に支えられて、さうなく寄せも得ざりし隙に、百姓ばらは思ひのまゝに、礫を打ちて皆もろ共に、何地ともなく失せしかば、行家は憤りの、やる方もなく歯を食ひしばりて、しばし其方を睨まへても、又今さらにせん方もなき、船は流れに従ひて、難波の方へ帰りけり。

さる程に、弥平兵衛宗清は、もとより水練の達者なり

（32ウ・33オ　行家、覚明と出くわす）

けれども、先に淀川に沈むといへども、いさゝかも溺るゝことなく、久しく水中に身を潜めて、主君の首を探り求め、そを携へて伏見に至りて、そこより陸にうち上り、つひに越後に落ち行きて、頼盛卿の首を葬り、鎌倉一統の世となりし頃まで、深く隠れてゐたりしを、知る者絶えてなかりけり。されば越後には、頼盛卿の墓今もある由、『越後名寄』に載せて具也。

○されば又行家は、船を難波に着けさせて、福原を指し

雑兵「今日はゑらひどい目に遭ふた。骨を折つても首さへ取らず、ちとやり損ないの筋だはへ。

覚（覚明）「かくあらんと思ひし故に、我が北国へ赴きし、その門出の折からに、置き土産なる諫言を、一つも用ひ給はぬは、よくも天魔の見入れしか。さてしなしたり〳〵。

行（行家）「その憤りはさることながら、こゝから届かぬ中途の行きあひ。まづ〳〵同道いたすでござらう。

て帰り行く程に、大夫坊覚明【范増】が、北国より帰るに会ひけり。その時覚明は、まづ行家に義仲の安否と、頼朝のことを問ひしかば、行家答へて、「さればとよ木曽殿は、往ぬる頃かやう〳〵の、童歌のありしにより、都に移り住まんとて、用意大方整ふたり。よりて頼盛卿の科を許して、案内者に次へ（32ウ・33オ）／し給はんとて、船路を淀まで下し給ひし、その折又かやうかやうの、事あるにより怒らせ給ひて、某討手を受け給はり、淀川まで追つかけて、討ち果たして候也。又佐殿のことは云々」と、ありつるまゝに告げしかば、覚明いたく驚きて、「そは一つとしてよろしからざる、おん計らひこそうたてけれ。かくあるべしと思ひしかば、某信濃へ赴く折、言葉を尽くして諫めしに、用ひ給はぬ不覚さよ。佐殿の事・池殿の横死は、今さら悔やむとも及ばず。せめて都へ移徙の、ことを諫めん、いざ給へ」とて、先に立ち道を急ぎて、行家ともろ共に、福原に帰り来て、さて義仲に北国の、安否を告げて又言ふやう、「某先に幾度となく、佐殿をばこゝに留めて、放ちやり給ふなと、申せしを忘れ給ひしか。そゞろに許してかの人を、相模へ入部させ給ひしは、これ第一の御不覚、いと口惜しきことにこそ候へ。これさへあるにいかにぞや、はかなき童の小歌を信じて、鍔田三郎が諫言を、用ひ給はずあまつさへ、鍔田に腹を切らせて、一人の忠臣を失ひ給ひしを、なほも悟らせ給ふことなく、都に移り住み給はんとて、その事をのみ急がせ給ひ、その義につきて頼盛卿を、許して後に討たせ給ひし、賞罰も亦正しからねば、今よりして何をもて、国民君に従ふべき。人の心の背くまに〳〵、佐殿鎌倉より撃つて上らば、遂に弓折れ勢ひ尽きて、かく申す我々まで、手を束ねて虜になるべし。都は四方に敵を受けて、武を用ふべきところにあらず。早く難波に居城を構へて、五畿内の守りを固くし、又国々に関を据えて、西の方は平家を抑へ、東は佐殿を制し給はゞ、勢ひ二つながら行はれて、海内に敵なかるべし。かくて又都へは、武勇の大将を選ませ給ひて、院の御所を守護し奉り、信濃宮を御位に、即け参らせんと乞はせ給はゞ、その名も正しく君に忠あり。この図を抜かせ給ひ

なば、天下は君の物ならず。賢慮を巡らし給ひね」と、道理を尽くして諫めしかば、義仲思はず吐息を吐きて、「和殿の意見はさることながら、都へ移徙の一条は、これ神の教えに任せて、用意大方整ひしを、今さら変改すべからず。頼朝は武勇なし、彼関東にありといふとも、必ず我が威風に恐れて、何ごとをかし出だすべき。さまでに思ふは遠慮に過ぎたり。この義ばかりは我が決断に、うち任してよ」と応へして、用ゆる気色はなかりけり。

◆義経、義仲のもとを去る

○こゝに又、奥源九郎義経【韓信】は、先に斎宮介親良の、勧めによりて思ふやう、「我が兄なりける佐殿には、襁褓の内に別れしかば、いまだ迭に面を見知らず、世の人も亦我を、佐殿の弟ならんとは、知る由絶えてなけれども、今親良が見る由ありて、鎌倉へとて手引きをいたすは、我が身の家兄に従ふべき、時節到来せしなるべし。我が兄は他人を愛して、かへつて兄弟を疑ひ給ふ、本性ありと思ふにより、名を変え素生を表はさで、義仲に仕へしは、功成り名遂げてその後に、家兄に対面せん為なりしに、両雄は並び立ずといふ、かの古言に相似たる、▲右の下へ／▲左の上より木曽と鎌倉と確執して、はや東西に分かれたり。さるを我なほこゝにあらば、これ骨肉を仇となす也。立去らんこともちろんなれども、東海道には所々に、新関を据えられて、たやすく人を通さねば、これ第一の難義也。秩父二郎重忠【陳平】は、かねてより佐殿に、心を寄する者なるに、秘かに彼に語らはゞ、助けになる事なからずやは」と、心一つに思ひ計りて、重忠の宿所に赴き、対面してさて言ふやう、「某久しく木曽殿に、従ひて候へども、用ひられねば功もなし。よりて身の暇を乞ひ申して、故郷へ帰らんと思ふ也。このといかゞあるべき」と、問へば重忠声を潜めて、「御辺暇を乞ひ給ふとも、木曽殿決して許し給はじ。さればとてこゝにありては、名を上げ家を興すに由なし。あたら智略を持ちながら、故郷に退き隠れんより、鎌倉に赴きて、佐殿に従ひ給へ。かの君寛仁大度にして、賢を招き士を愛して、人の諫めを容るゝこと、大海の塵芥を、漏らさゞるに異ならねば、物惜しみをして人を得知

（33ウ・34オ　義経、秘かに重忠を訪れる）

らぬ、木曽殿の類にあらず。某も鎌倉へ、行きて仕へんと思へども、いまだ便りを得ざる也。御辺いよ〳〵鎌倉へ、赴かんと思ひ給はゞ、関所の切手を参らすべし。某この義を掌れば、これらの事は自由也。道々の関所にて、切手を出だして見せ給はゞ、何処も障りあるべからず。疾く〳〵用意し給へ」と、忍びやかに説き示して、件の切手を渡すにぞ、義経斜めならず喜びて、「某も鎌倉へ、赴かばやと思ひしかども、御辺の心を測りかねて、故郷へ帰らんとは言ひし也、実にこれこの賜物は、千金にこそ候なれ。日ならず当所を●左へ／●右より立退くべ

重（重忠）これは是難波より、駿河路までの関所の画図。○／○切手と共に秘かに餞。道を急いで■／■追手の用心。今より無事を祈りますぞや。

つね（義経）「重ね〳〵し情けの賜物、乗馬はかねて用意して、一日に二十里走るは必定。これにつけても其元にも、早く東へ下向の門出、お心がけが肝要々々。

し」と、暇乞ひしつ宿所に帰りて、その夜秘かに用意をしつゝ、旅装ひを整へて、明けの朝只一騎、大手の門を出づる時、門戸を預かる雑兵に、「我らは些の用事ありて、遠方なる友人を、訪はんとて赴く也。この義は次へ（33ウ・34オ）／昨日云々と、上に聞こえ上げたれば、明日ならでは帰るべからず。しか心得て給はれ」と、真しやかに言ひ捨てて、うち乗る馬に鞭を当てて、東を指してぞ走らせける。

○かくてはや、三四日を経にけれど、義経帰り来ざりしかば、かの門番なる雑兵ら、やうやくに訝りて、つひにこと云々と、覚明に訴へけり。覚明これにうち驚きて、「さては九郎は逐電して、鎌倉へこそ走りけめ。かの人佐殿に従はゞ、只これ味方の憂ひにて、虎に翼を添ゆるがごとし。又一重ねの苦労を増したり。速やかに追ひ止めて、後の憂ひを除かん」とて、手塚太郎光盛【鍾離昧】に、かやう〳〵と心得さして、その日義経を追はせけり。

さる程に光盛は、早走りなる雑兵を、十人余り従へて、馬を飛ばして追ひ行くこと、二三十里に及びしかども、はや三日四日を経にければ、つひに追ひ着くこと叶はず。此故に光盛は、従へ来つる雑兵をもて、義経逐電のことの由を、尾張・遠江・駿河なる、難波経久・瀬尾親子に、かやう〳〵と告げ知らせ、「夜も日も旅人に心をつけて、奥九郎と見るならば、搦め捕るべし」と言ひ遣はし、その身はそこより只いたづらに、福原に帰り来にければ、覚明いよ〳〵後悔して、臍を噛めどもせん方なし。「まづことの趣を、将軍に聞え上げん」とて、行家・光盛らと共に、義仲に見参す。

◆義仲、都へ移る

その時義仲は、山吹姫【虞美人】の弾き給ふ、琴の調べを聞かんとて、奥深くありしかば、次の間まで立出でて、ことの由を尋ぬるに、覚明まづ膝を進めて、「火急の言上、余の義にあらず。奥九郎が逐電して、はや五六日になりて候。某らはそのことを、一昨日初めて聞しかば、手塚太郎光盛をもて、ひたすらに追はせしかども、時日やうやく遅れし故に、得追ひつかで空しく帰れり。

（34ウ・35オ　義仲、覚明の進言を容れず）

思ふに九郎は鎌倉へ、走りて佐殿に従ふなるべし。彼は文学武略に長けて、もとより大将の器量あり。某この義を思ふをもて、しば〳〵勧め奉り、奥九郎を取り立てて、必ず重く用ひ給へ。もし用ふるの御心なくば、事に託け

行（行家）「こと整ひし上からは、都移りの変改も、なりますまい〳〵。

つか（手塚）「瀬尾・難波に通達したれば、お気遣ひはござりますまい。

山（山吹）「只何ごとも我が君の、お為を思ふはすなはち忠臣。げに頼もしい人たちじやなう。

仲（義仲）「都移りもはや二三日、諸軍勢に触れ知らせしに、又今さらに止められんや。麒麟も老いては駑馬に及ばず。軍師はさまでに奥九郎を、手強く思ふは心の衰へ。ナントさうではあるまいか。

覚（覚明）「スリヤこれ程に申しても、お聞入れはござりませぬか。ハテ是非もないことじやなア。

託け討ち取らせて、後の憂ひを除き給へと、申せしことを等閑に、聞こし召したる故にこそ、つひに彼奴を走らしたれ。便なきことに候はずや」と、言ふを義仲聞あへず、「何ごとかと思ひしに、奥九郎が逐電せしとて、さまでに驚くことゝは覚えず。我そのはじめ世の人の、風聞を伝へ聞しに、九郎は浪人たりし時、市人の股を潜りて恥とせず、洗濯婆に食をもらふて、飢ゑをしのぎし者とぞいふなる【▼初編十六丁表以下。本稿（二）参照】。△／△彼が頼朝に従ふ共、何程のことをかし出だすべき。それのみならず頼朝が、鎌倉へ赴く時、箱根山なる懸橋を、焼き落とせしと聞えたり。かゝれば九郎は鎌倉へ、赴かんと欲するとも、陸路は行き来たやすからず、瀬尾・難波に通達したらば、幾程もなく搦め捕りて、参らするにぞあらんずらん」と、言ふを覚明押し返して、「さな宣ひそ、佐殿が、箱根の橋を焼きたるは、只これ味方に油断させて、小道より撃つて出でん為也。九郎が浪人たりし時、市人の股を潜りしは、小事を忍びて【▲右の下へ／▲左の上より】大謀を、なさんと思ひし丈夫の魂、人の及ぶ所にあらず。これにつけても難波にゐまして、都にな移り住み給ひそ。徳を修め守りを固くし、東を防ぐ御用心、肝要にこそ候へ」と、繰り返しつゝ諫めしを、義仲聞かず頭を振りて、「軍師の意見その由あり共、都移りの一条は、用意すでに整ひて、両三日の程にこそ、うち発つべしと触れ知らせしに、今さらにそを止められんや。我が心すでに決せり。必ず多言することなかれ」と、止めてつひに福原より、都へ移徙したりけり。

◆義経、鎌倉へ向かう

それはさておき義経は、重忠の情けにて、図らず得たる切手をもて、難波の新関、鈴鹿の関、この余、所々に据えられたる、関所々々を過るごとに、云々と作り名して、件の切手を見せしかば、関守の士卒らは、ちつとも疑ふ心なく、おめ〳〵として通しける。【次へ】

（34ウ・35オ）

かくて又義経は、日毎に馬を走らせて、さて行くと行く程に、遠江国なりける、小夜の中山の辺まで来にけり。こゝも又、その麓路の日坂に、新関のありしかば、義経

はさり気なく、馬より下りて関所に立寄り、「我ら事は藤原の、何がしと呼ばるゝ者也。某の里よりしか〴〵の、所へ赴く所要あり。切手も所持して候へば、これ見給へ」と懐より、とり出だして渡すにぞ、関守これを受け取りて、熟々見つゝうち頷き、■／■「げに鑑札に相違なし。いざ〳〵通り給へ」とて、件の切手を返せしかば、義経は会釈して、再び馬にうち乗りて、道を早めて行く程に、山路を半道ばかり登りし時、たちまち後より騎馬武者一人、鞭を上げて追つかけ来つ、▲右の下へ／▲左の上より義経を呼び止めて、「先に名乗られし国所、姓名に疑ひあれば、件の切手を預かりおきて、帰るさに渡すべしと、関の頭人の言はるゝ也。いざ某に渡し給へ」と、言ひつゝ馬をおし並べて、何心なく手を出だすを、義経すかさず抜き撃ちに、その肩先をはたと斬る、鞍馬八流奥義を極めし、手練の大刀風誤たず、件の武士は唐竹割りに、斬られて●／●「あつ」と叫びも果てず、たちまち馬よりだうと落ちて、二つになりて倒れけり。

（35ウ）

（35ウ　義経、追手を斬り倒す）

つね（義経）「この四巻には戦がないから、此位なことは有内【▼ありがち】だ。作者ものう〳〵とするだらう。

武（追手の武士）「ダア引。

（八）

◆義経、木樵を殺める

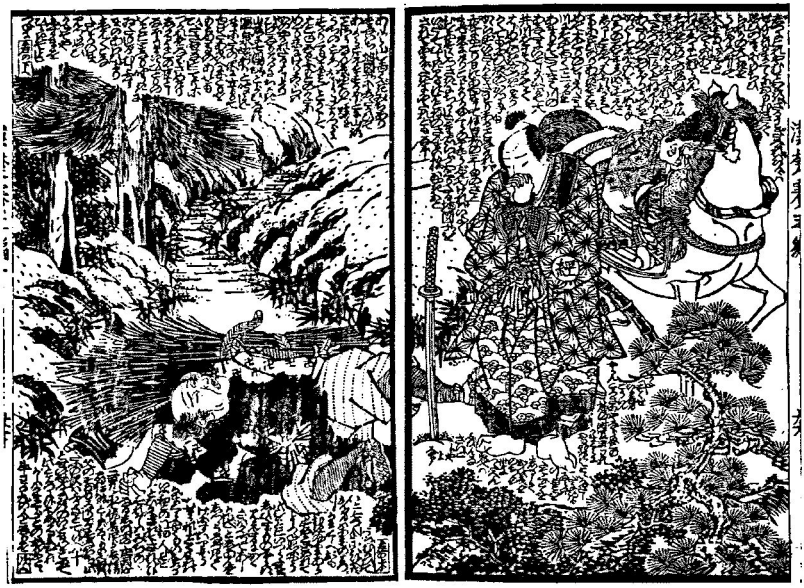
されば又義経は、件の武士を斬り殺して、血刀を拭ひ収め、「再び追手をかけらるゝこと、あるべし」と思ひしかば、本街道をば走らずして、道なき道に分け登り、行けども〳〵蔦葛、木立の他に物もなければ、馬さへ主も疲れ果てて、西か東かしら雲【▼「白雲」と「知らず」】の、をりゐる方を仰ぎ見つ、「いかにすべき」と思ふ折から、一人の木樵【▼原作も樵夫】に会ひにけり。

（36オ　義経、木樵に道を尋ねる）

その時義経は、「こゃ〳〵」と呼び止めて、「やよ杣人よ、もの問はん。我らは駿河へ赴く者也。さるをこの山路にて、そゞろに道を踏み違へけん、指して行くべき方に至らず。大井川は何処ぞや、教えてたべ」と他事もなく、問はれて木樵はうち頷き、「そは悪くも来給ひけり。こゝは粟が嶽【▼掛川市所在】の東にて、無間山【▼静岡市所在】へ程近し。この所より本街道へ、戻り給はゞ行き易けれども、さではいたく道に損あり。あれ見そなはせ、あの谷川の流れに添ふて、何処までも行かせ給へば、▲右の下へ／▲左の上より菊川の彼方なる、山里へ教えませう〳〵。

木樵「かうござつては大きな損じやが、近道がある、

つね（義経）「それは千万忝い。石ももの言ふ夜啼の里、無間の鐘をきく川【▼「聞く」と「菊川」】の、【▼「◀」脱】／◀聞かずはいよ〳〵迷ふべし。その近道はどちらじやの。



（36ウ・37オ　義経、殺めた木樵を憐れむ）

出づる也。そこよりして大井川へは、程遠からず候」と、懇ろに教えけり。義経つら〳〵うち聞て、喜びを述べ立別れて、再び馬を進めつゝ、たちまち心に思ふやう、「日坂の関よりして、重ねて追手をかくるならば、あの木樵が口走りて、我が行方を定かに告げん。しからば今禍を、未然に払ひ除かずは、我が身いよ〳〵危ふかるべし。不仁の業に似たれども、人少しきを忍ばざれば、大謀を乱るといへり。大丈夫たらん者、婦人の仁にかゝづらひて、虜となるを待つべしやは。さは」とてやがて忙がはしく、又七八町乗り戻して、木樵のほとりに馳せ近付き、馬より下りて、「やよ仙人、我思ふ由あれば、そちが命をくれよかし」と、言はれて驚く件の木樵は、逃げんとするを逃がしもやらず、只一刀に斬り殺して、刃

つね（義経）「宿世いかなる業因やらん、殺さにやならぬこの場の時宜。我鎌倉に赴きて、志だに得るならば、碑を建て功徳を記して、恩義を後の世に伝へん。思へば不憫な最期じやよなア。

を収めて辺りを見返り、「さるにても罪もなき、此杣人の不運さよ。死したる者の知る由あらば、さぞ恨めしく思ふらめ。次へ（36オ）／実にこれやむことを得ざる、業なればいかゞはせん。我鎌倉に赴きて、思ひのまゝに用ひられ、かの大敵を撃ち滅ぼして、大国守となるならば、跡懇ろに弔はん。それをせめての思ひ出に、仏果を得よや南無阿弥陀仏、弥陀仏々々々」と念じつゝ、辺りの土を掘り穿ちて、辛くして死骸を埋め、手頃の石を転ばし据えて、識としつゝ又伏し拝みて、馬に飛び乗り足掻きを早めて、木樵の教えし谷川に、添ふて行くこと一里余り、果たして菊川の彼方に出でしかば、やがて大井川を渡り果てて、初めて息を吐きにけり。

かくても日坂の追手もかゝらず、いさゝかも障りあることなければ、夜に宿り日に歩まして、伊豆の三島の里まで来にけり。こゝより鎌倉の領分也ければ、いよ〳〵心を安くしつ、先に親良・重忠らが贈りたる、地図を出だして開き見るに、箱根の三枚橋は焼き落とされて、越えがたきに似たれども、なほ足柄山を行くべき道あり。すなはち地図に従ひて、足柄越えをする程に、山路殊更難義にて、一騎打ちの所多かるを、葛にすがり雲を踏みて、とかくして箱根なる、麓の方に巡り来にけり。こゝらは彼の焼かれたる、橋より東なりけるに、近き山路に七湯と呼びなす、温泉ありと聞えしまゝに、塔之沢に立寄りて、湯桁ある家に宿りを求め、馬の足をも浸させなどして、共に疲れを慰めけり。

◆義経、忠信と邂逅する

しかるにこの夜、年なほ若き一人の男、隣坐敷にゐたりしが、蒸襖の間より、しば〳〵此方を垣間見つゝ、思ひかねてや襖を開きて、義経に▲右の下へ／▲左の上よりうち向かひて、「いと卒爾には候へ共、御身は明日のころ、鎌倉へ、赴き給ふにあらずや」と、問はれて義経思ふやう、「此男の面魂、只者ならず見えたるに、隠さばかへつて悪しかるべし」と、思案をしつゝ頷きて、「げに推量せられしごとく、我は鎌倉へ行く者也。しか言ふ和殿は何人ぞ」と、問ひ返されて「されば候。某は陸奥なる、信夫庄司が二男にて、佐藤四郎兵衛忠信【辛

奇】と呼ばるゝ者也。母は父の側女なりしが、すなはち此塔之沢は、故郷にて候へば、十年以前に身の暇を、乞ふて此所に候也。しかるに某は、鎌倉殿の御弟、牛若丸の人となりを 次へ （36ウ・37オ）／秘かに慕ひ奉り、兄継信と心を合はして、仕へばやと思ひしに、牛若丸は鎌倉殿の、義兵を挙げさせ給ひしころ、秀衡のもとを立出でて、御行方定かならず。我々望みを失ひて、鎌倉にたよりを求めて、かの御在処を尋ねんと、思ふによりて故郷より、遥々母の宿所に来て、かく逗留して候へども、鎌倉に知る人なければ、行きて尋ねんはさすがにて、この宿念を果たすに由なし。牛若丸の御在処を、知りてをはさば教え給ひね、この義を尋ね申さんとて、こととのこゝに及べる也」と、言ふに義経思ふやう、「げにこの忠信もその兄継信も、我が身陸奥にありし時、その名は早く伝へ聞たり、忠信義勇の若者なりと、人の言ひしが違はざりき。しかれども我が本名を、こゝにて明かすはなほ早し」と、思ひ返してうち頷き、「そは幸ひのことにこそ候へ。某ことは牛若殿に、由縁ある者にして、奥九郎と呼ばるゝ也。しかれども只今は、かの君何処にましますや、定かにそれと告げがたし。さりながら、牛若は近き日に、鎌倉に赴きて、兄佐殿に従はんと、宣ひしことあれば、こと大方は違ふべからず。御辺いよ〳〵かの君に、仕へんと思ひ給はゞ、しばらくこゝに留まりて、ことの便宜を待ち給へ。かの君重く用ひられて、大将軍になり上り、大軍を引率して、都へ攻め上ると聞えなば、その折道に待ち受けて、かの軍に従はゞ、つひに日ごろの本意を遂げん。その折今日の志を、述べ伝ふる証人には、某必ず立つべき也。これらの由は人に知らせぬ、秘めごとに候へども、御辺の心底を感ずるの余り、言のこゝに及べるのみ、余所にな漏らし給ひそ」と、囁き示せば忠信は、喜ぶこと大方ならず、「そは願ふても得がたかるべき、幸ひにこそ候なれ。教えに任していつまでも、此所に逗留して、吉左右を待ち候はん。まづ我が母をも御見知り、下されかし」と忙はしく、厨の方に退きて、云々と囁くにぞ、母も喜びて出でて来つ、義経に対面して、大方ならずもてなしけり。

（37ウ・38オ　義経、忠信母子と対面する）

かくてもなほ義経は、奥九郎とのみ名乗りて、いまだ素生を明かさねども、忠信はその言ふ由を、いさゝかも疑はで、これより捨てがたき思ひあり、「便りもあらば兄継信にも、告げ知らせ呼び迎へて、共に時節を待たん」とて、今年はこゝに逗留の、心構へをしたりける。

かくて義経はその明けの朝、別れを告げてもとのごと

母「母と名乗るもをこがましい、筋目正しき故主の胤。この子の願ひの叶ふまで、●／●こゝに留めて置きませう。必ず〳〵お忘れなく、お世話を頼み上げまする。

信（忠信）「かやうのことは思ひも寄らず。不躾なる△／△為体にて、身の上話も失礼千万。何分あなたのお手引きにて、牛若様のお目通りの、願ひは只今申せし通り。必ずお見捨て下されまするな。

つね（義経）「ハテ頼もしい志。気遣ひめさるな、心得ました〳〵。

く、馬に〇右の下へ／〇左の上よりうち乗りて出でて行くを、忠信は止めかねて、「鎌倉まで馬の口を、取らん」とて送りけるを、義経しば〳〵おし止めて、「鎌倉まで送られては、かへつて我が為によろしからず。此後とても疎遠にして、秘かに時節を待ち給へ」と、言ふに忠信は強ひかねて、つひに再会を契りつゝ、別れて塔之沢へ帰りけり。

◆義経、鎌倉に至る

〇かくて義経は、鎌倉に到着して、米町の旅籠屋を宿としつ、巷の風俗を窺ふに、国豊かにして民肥えたり。されば▲左の中へ／▲右の下より士農工商、各々よくその業を勤めて、いさゝかも驕ることなく、耕す者は畔を譲り、行く者は道を譲りて、落ちたるを拾ふことなく、又訴へを好む者なし。実にこれ上国の風俗にて、かの義仲の暴虐なる、政に似るべうもあらず、いと頼もしく見えしかば、深く心に甘服して、営門の辺に至れば、大手の門の傍らに、賢人才子を招かるゝ、高札を掲げ出だして、十三ケ条を記したり。うち仰ぎてこれを見るに、

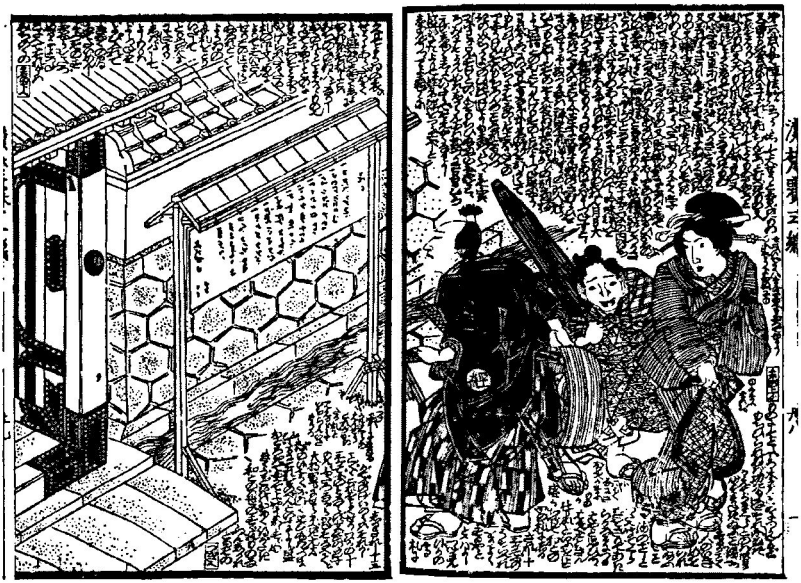
次へ（37ウ・38オ）

第一は、武略・陣法に通達して、大将となるべき者、又勇力武芸人に優れて、先陣を務むべき者、又敵を謀り駆け引きに調練して、よく物見を務むべき者、又天文・風水を諳んぜし者、又地理をよく知りて、導き人となるべき者、又心ざま正直にして、記録を掌るべき者、又義理に賢しくして、よく軍議に与るべき者、又弁舌爽やかにして、四方に使ひすべき者、又よく算筆に通達せし者、又博学にして博士となるべき者、又医術に詳しくして、典薬となるべき者、又あるひは早走りの者、あるひは忍びの術をよくして、細作となるべき者、よく銭糧を掌りて私なく、蔵法師となすべき者。

右十三が条の内、一芸に優れたる者あらば、速やかに申し出づべし。吟味を遂げて相違なくは、必ず用ひらるべきもの也。

年月日　　大江広元・和田義盛受け給はる

とありしかば、義経少し退きて、件のことを人に問ふに、



（38ウ・39オ　義経、高札を読む）

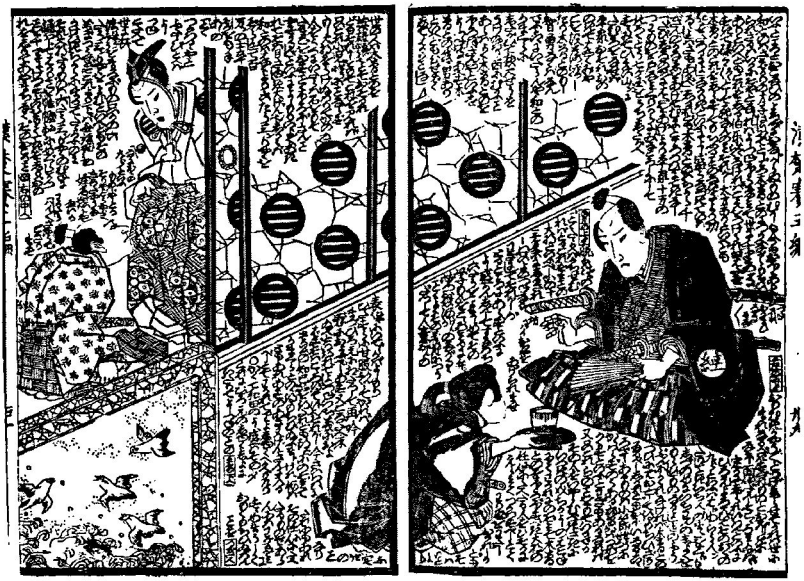
「賢才の侍を招かせらるゝ惣官は、評定衆の頭人広元主【蕭何】也、その副役は侍所の別当義盛殿【夏侯嬰】也」と教えけり。

その時義経思ふやう、「我今こゝに至りても、なほ本名をおし隠して、用ひられて後にこそ、名乗らんことはかねての料簡、そは勿論のことなれども、斎宮介親良の、引き付けし由もしばらく包みて、実に我が兄佐殿の、人を用ひ給ふや否やを、試みるこそよかんめれ。しからんには惣官なる、広元の宿所へ至らで、副役なる義盛に、頼りて姓名を通ずべし」と、思案をしつゝ旅宿に帰りて、用意の衣装に改めて、義盛の宿所に赴き、「某ことは陸奥の住人なりし、奥九郎と呼ばるゝ者也。かねて

女「ついでに八幡さまへ参つて行かう。小僧よ犬に〇／〇構ふまいぞ。

小（小僧）「ハイ〳〵、何さお前、構ふものか。

つね（義経）「聞しに勝る鎌倉の繁昌。これがかの高札と見える。ドリヤ一覧いたさうか。



（39ウ・40オ　義経、義盛を訪れる）

鎌倉殿に奉公の望みあり。掲げられたる高札の、御文面によりて推参せり。この由申し給はれ」と、用意の手札取り出だして、取り次ぎ人に渡しけり。

しばらくして義盛は、義経を呼び入れて、客の間にて対面し、まづその素生を尋ぬるに、義経答へて「某は、陸奥の▲右の下へ／▲左の上より者にして、木曽殿に仕へしかど、用ひられねば功もなし。それに引き替えて鎌倉殿は、賢を招き給ふこと渇するがごとく、人の諫めを容れ給ふこと、海のごとしと伝へ聞て、暗きを去りて明らかなるに、付かばやと思ひつゝ、遥々推参仕りぬ」と、言ふ

坊「ハイお茶をあげられませ。

つね（義経）「イヤお構ひなさるな〳〵。

（左上。若党、義盛に義経の来訪を告ぐ）

○【▼三つ引両。義盛】「何、奥九郎といふ者じやとか。そりやどうやら、聞いたやうな姓名じやないか。

若党「ハイ〳〵、左様でござります。

を義盛うち聞て、「和殿かの札に記されし十三箇条の内、いづれをかよくするや」と、問へば義経「さん候。かの高札に記されし、十三箇条の芸能は、某ことゞくこれをよくせり。只かの十三箇条のみならず、文武の学問、二つながら兼ね備へて、大将軍にせらるべき、大才の候也。疑はしく思ひ給はゞ、詳らかにこれを述べん」と、言ふに義盛驚きて、やがて上坐におし進め、「聞くがごときは多く得がたき、和殿は世の優れ者ならん。しかれどもその次へ（38ウ・39オ）／言ふ所と行ひの、よろづに同じからぬ者、昔も今も多くあり。和殿はさばかりの才子にて、年ごろ木曽殿に仕へながら、用ひられざるはいかにぞや」と、詰れば義経ほう笑みて、「世に千里の馬ありといへども、これを知る伯楽なければ、肥を付けられ田畑を鋤きて、碌々として死なんのみ。某大才ありといへども、木曽殿これを知らずして、用ふることのなきにより、功を立つるに由なかりき」と、言ふに義盛頷きて、「言はるゝ由はさもあるべし。しかれども木曽殿は、力千斤の鼎を上げて、向かふ所つひに敵なし。一度信濃路に旗を挙げしより、平家十万の兵を、砺波・倶利伽羅に皆殺しにして、北陸道七ケ国を撃ち従へ、進みて比叡山に屯をなせば、平家恐れ戦きて、早く都を没落したり。木曽殿もし智勇なくば、何条こゝに至らんや。和殿鎌倉に従ひて、惣大将を受け給はり、西に向かふことあらば、よく木曽殿を滅ぼさんや」と、言ふを義経聞あへず、「木曽殿武勇ありといへども、心狭くして謀なし。世の人は木曽殿を、英雄也とて恐るれども、某をもてこれを見れば、只これ小児に異ならず。もし大将を受け給はりて、かの人を討つに至らば、石をもて卵を圧すごとく、滅ぼさんこと易かるべし」と、言ふに義盛いよ〳〵呆れて、「そは目覚ましき大言也。しからば和殿は早くより、六韜三略を諳んじて、百万の士卒をも、手足のごとく使はるゝや」と、再び問へば義経答へて、「世に兵法を学ぶ者、只かの六韜三略を、読むといへどもその義に通ぜず、これより下は無謀の駆け引き、力に任して戦ふのみ。それ大将たる者は、六韜三略の旨に通じて、謀を帷幄に巡らし、かつ事を千里に決す。こゝをもて敵

を知り、己を知りて過ちなく、その起こること〇右の中へ／〇左の上より脱兎のごとく、戦へば勝ち攻むれば取る、これを真の大将といふべし。かの十三ケ条に記されしは、只世の常なる業にして、某が取るところにあらず」と、言ふに義盛感心して、すなはち『六韜』を読ましめて、その学問を試みるに、弁舌懸河の流るゝごとく、よくその義理に通達して、人意の表に出でしかば、義盛ひたすらに甘服して、「かゝればまづ、広元に相達して、

（40ウ　広元、義盛と明日を約す）

再吟に及ぶべし。明日又此方へ来給へ」と、言はれて義経一義に及ばず、「そは心得て候也。某今は幸ひに、貴公の知己を得たれども、期に臨みて鎌倉殿の、得用ひ給ふまじけれ。何はともあれ明日の朝、又見参に入るべし」とて、別れて旅宿へ帰りけり。

〇かくて和田義盛は、その夕暮れに、広元の宿所に至りて、義経のことの▲右の下へ／▲左の中より趣、かやうくと告げ知らせて、「彼は世に稀なるべき、優れ者と思しきに、なほ面談して試み給はゞ、定かに知られ候はん」と、言ふに広元喜びて、「その奥九郎といふは、はじめ浪人たりし時、市人の股を潜り、賤女に一椀の、食をもらひし者なる由、世の風聞に隠れなければ、木曽殿

ひろ（広元）「それは何より喜ばしいこと。●／●いづれ明日対面して、とくと様子を見ませうくゝ。

〇【▼三つ引両。義盛】「只弁舌に任せたる、大言とは思はれず。大才子とは見えますてや。

つひに見落として、得用ひざりしなるべし。しかれども大いなる、志ある者は、小節に拘はらず、能ある鷹は爪を隠すと、いふ諺もあるなれば、又只これらのことをもて、いかでかその人を卑しむべき。先に斎宮介親良の、箱根にて別れに臨みて、『木曽殿を滅ぼすべき、大将の任に堪へたる人を、秘かに選み遣はすべし』とて、割り符を渡し置かれしかども、そはもとより不定のことなり。誰にもあれその任に、堪へたる者であらんには、我が君に勧め申して、重く用ひ給はんことを、次へ（39ウ・40オ）／乞ひ願ひ奉らん。明日は必ず伴ひ来給へ、待ち参らする」と頓の応へに、義盛も亦喜びて、閑談に小夜更けしかば、明日と契りて立別れ、やがて宿所へ帰りけり。○これよりの後、義経は、やうやく用ひられて、東軍の惣大将となるまでの、物語なほ長かり、そは第四編に著してん。見る人これより佳境に入るべし。

作者曰この草紙の物語は、先にも自序に言へるごとく、漢楚の戦ひ、頼朝・義仲の確執、和漢各々その実録あるを、これかれ一つに取り合はして、互ひに事実を失はず、約束を違へずして、よく綴りなさんこと、世の才子はいかにか知らず、予は容易からぬ業也と思へり。もとこれ板元の責めを塞ぐ、例の灯下の戯墨にして、労して功もなきものながら、見る人は三分にて、作者の苦心は七分なるべし。就中画組みに困るは、戦のみ多くして、世話場と女は枕林の中なる、花紅葉より稀なれば也。されども追々に編を重ねて、全部揃ふに至りては、又▲右の下へ／▲上よりまんざらでもなかるべし。

初めこの板元が、「いかで女の三国志を」とて、乞ひ求めしを、そはなしがたき、業なれば切に辞みて、その代はりに此草紙を、綴ることとはなりたり。今年はこの他に、世話もの丶合巻【▼『千代褚良著聞集』のことであろう】も趣向あり、引続きて出板すべし。御評判々々。

馬琴作　国安画　浄書金川

※左上、売薬広告

家伝神女湯〔婦人血の道諸病の妙薬〕　一包代百銅

この薬は多く高料の薬種入れり。症に従ひて用ふるときは、功あらずといふことなし。只上治しを旨とする、ふり出しの類にあらず。功能一度試み知るべし。

大包代弐朱、中包代一匁五分、小包代五分。端売不仕候。

精製奇応丸

薬種を選み、製方を詳らかにし、分量家伝の加減をもつてす。此故に、その功百倍、あたかも神のごとし。

熊胆黒丸子　熊の胆汁を以丸ず。　一包代五分

多く糊をまじへず。

婦人つぎ虫の妙薬　一包代六十四銅、半包代三十二銅

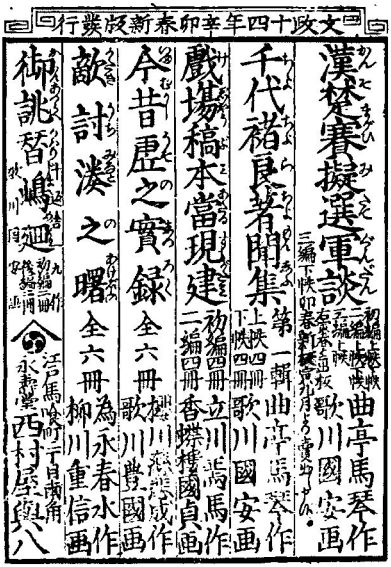
つぎ虫はさら也、産後下り物の滞りに用ひて血塊の憂ひなし。

製薬〔神田明神下同朋町東横丁〕　本家滝沢氏

弘所　元飯田町中坂下南側四方の向　たき沢氏

（40ウ）

《第四冊　後表紙封面》



▼奥目録「文政十四年辛卯春新版発行」。本作に関する記述は、以下の通り。

漢楚賽擬選軍談　初編上帙下帙

二編上帙下帙　曲亭馬琴作

三編上帙　歌川国安画

右寅春迄出板

三編下帙卯春新板。寅九月より売出し申候。

『千代褚良著聞集』第一輯は天保三年刊。

《第三編解題》

一　執筆・刊行の経過

文政十二年（一八二九）四月二十二日の馬琴日記に、以下のような記述が見える。

一　昼後、西村や与八より、『漢楚賽』著述催促也。予、対面。其後、帰去。

「与八より」とあるので、この日著作堂を訪れたのは西村屋当人ではなく、その使いの者であったかも知れない。これ以降、与八は六月十二日・七月十六日にも馬琴と対面しており、また六月十七日・八月五日には書状を遣わしている。いずれの場合も、与八の主な用向きは『漢楚賽擬選軍談』第三編の「著述催促」であったが、六月十七日の対面に際して、馬琴は同編稿本が「おそなはり可申旨」を告知した。

板元からの度重なる督促にもかかわらず、馬琴がなかなか『漢楚賽』の筆を執らなかった理由については、大坂の書肆河内屋茂兵衛宛の書状に見える、以下のような記述が参考になる。

（前略）三月廿一日当地大火災、近来稀成事ニて、蔽屋ハ幸ニ無恙候へ共、親類共、武家・町家共、七八軒類焼ニ付、大勢押込、以之外混雑ニ及び、且懇意之書肆・画工・筆工共、大かた致類焼候。依之、右一義ニのミ日ヲおくり、四・五ノ両月は、夢のごとくニ暮し候事ニ御座候。依之、中だるみいたし、諸事手都合あしく罷成候内、大暑ニ赴、一時斗霍乱いたし、九死一生之病難後、暑中ハ甚おそれ候故、弥及延引候事ニ御座候。（中略）右ニ付、当年ハ合巻絵草紙の拙作も、例よりすけなく候故、これも日々催促ニて、こまり入申候。いづれ、少しも秋冷ニ赴候ハヾ、早々取かゝり可申候間、此段、御承知可被下候。

（以下略。文政十二年八月六日付河茂宛馬琴書翰）

『武江年表』によれば、この年三月二十一日の火災は、巳の刻過ぎに「神田佐久間町二丁目河岸の材木小屋」か

ら出火し、「南北凡そ一里余、東西二十余町」の範囲を焼いて、翌日に鎮火した。類焼した馬琴「懇意之書肆」には、『漢楚賽』の板元である西村屋も含まれたが、大火の翌月には右に見たごとく、馬琴に原稿を催促しているので、永寿堂の営業再開に、さしたる時日は要さなかったのであろう。

大火後の穏やかならぬ世情の中、馬琴は四月下旬から合巻の編述を再開し、六月までに仙鶴堂の『傾城水滸伝』第九編、甘泉堂の『金毘羅船利生纜』第七編、錦耕堂の『殺生石後日怪談』第三編上帙を綴り終えている。その後は執筆量が大幅に減退しており、右の書翰にもあるとおり、前々年閏六月の霍乱以来、ことさらに暑気を厭うようになった様子がうかがえる。

八月八日に至って、『後日怪談』第三編下帙がようやく擱筆され、翌日から『漢楚賽』第三編の編述が開始された。同月十五日に上帙上冊（巻一・二）が成稿すると、馬琴はひとたび同作を差し置いて、錦森堂の『風俗金魚伝』下編上帙と、『傾城水滸伝』第十編上帙とを綴っている。

その後、八月二十九日に『漢楚賽』の執筆が再開され、翌月三日には上帙下冊（巻三・四）の稿本が全備した(*1)。九月二十九日には、「『漢楚賽』三編上帙四冊分潤筆、金弐両弐分」が、西村屋から馬琴のもとへ届けられている。

十二月十六日から二十五日までの期間に、摺本校合が慌ただしく行われ、『漢楚賽』第三編上帙が売り出されたのは、同月二十八日のことであった。

以上のように、本編上帙の執筆経過は、作者馬琴の日記から、詳細に跡づけることが可能である。これに対して、翌文政十三年（十二月十日に天保改元）に執筆・刊刻された下帙の成立については、同年の馬琴日記が失われているため、確実な情報を得ることができない。

『漢楚賽擬選軍談』は、本編をもって刊行が杜絶する。天保四年には、本作の初集のみが、表紙を簡素なものに改めた「並合巻」として再印されており(*2)、これは「田舎注文」に応じた所為であったという（天保三年

九月十四日日記）。この作業には馬琴も手を貸しており、新たな表紙に書き入れる文言や、年記の改刻などを指示したばかりでなく、自作のみを列挙した奥目録を新たに草してもいる。その奥目録に紹介された本作の概要は、以下のとおりである。

初編二編三編　歌川国安画
漢楚賽擬選軍談
第四編近刻　五渡亭国貞画
頼朝・よし仲の雀執、源平盛衰記のおもむきを漢楚七十余戦になぞらへたる、和漢撮合の作り物がたりにて、その趣向に無理なることなく、尤興ある冊子なり。

（慶應義塾大学図書館蔵本による）

本作の挿絵を担当した歌川国安は、天保三年七月に没しており、右の文章が執筆された九月十九日頃には、後継の画工を国貞とすることで、馬琴と与八との相談がまとまっていたのであろう。とはいえ、この時点でも『漢楚賽』続刊の具体的な作業が始まっていたわけではなかった。

書肆永寿堂の衰退と、同人が手がけた馬琴合巻の中断については、拙稿「曲亭馬琴『千代褚良著聞集』翻刻と影印（二）」（江戸風雅19。令和元年）の「はじめに」において概観した。出版書肆西村屋の経営不振と、作者馬琴の合巻に対する執筆意欲の減退が重なって、『漢楚賽擬選軍談』と『千代褚良著聞集』とは杜絶を余儀なくされたのである。

二　『通俗漢楚軍談』の翻案

ここでは初編・二編と同様に、本作と『通俗漢楚軍談』との対応関係を整理しつつ、若干の補説を行うこととしたい。『漢楚賽』第三編の各章段について、本稿で施した見出しを最初に掲げ、その下に『漢楚軍談』の対応する章段名（初出以外は短縮）を記した。見出しの記号を「◇」としたものは、『漢楚軍談』には由来しない、本作独自の展開である。『漢楚軍談』の章段には丸数字

（①②……）を付して、各巻における配置を示した。

・上帙上（第一冊）

◆義定、頼朝の陣に来たる　巻三⑤「項伯夜走救張良」

『漢楚軍談』の項伯（項羽の叔父）に擬された長瀬判官代義定は、「義仲の従兄弟」でありながら、斎宮次官親良（原作の張良）の「莫逆の友」でもある。長瀬氏は信濃国小県郡長瀬の豪族で、流布本『平家物語』巻九「宇治川」には、「木曽殿の家の子」である「長瀬判官代重綱」が登場する。これを『源平盛衰記』巻三十五「高綱渡宇治河」は、「木曽ガ従弟ニ、信濃国住人長瀬判官代義員」としており、馬琴は『盛衰記』に基づいて、『漢楚賽』の長瀬義定を造型したのであろう。

頼朝の陣へと向かう義定に声をかけた、多湖二郎季包（五丁表）も、『盛衰記』巻三十五「東使戦木曽」に登場する義仲の郎党「多胡二郎家包」に基づく人物である。将軍家の偏諱を憚って、「家」字を「季」字に改めるのは、馬琴の常套手段といえる。

◇親良、弁慶を語らう

「鴻門会」における樊噲の役回りを、本作では武蔵坊弁慶に割り振ったため、ここで親良が旧知の弁慶を訪れる一段が、新たに設けられたのである。

◆長瀬義定、義仲を説く　巻三⑤「項伯夜走」

◇親良、鴻の水門に使いする

ここで親良は義仲の陣に至り、頼朝の軍勢が兵庫で義仲を拒んだ一件を弁解しているが、『漢楚軍談』において、項羽と張良との初対面は、張良が劉邦とともに鴻門へ至ったのちである。

・上帙下（第二冊）

◆覚明、義仲に謀を授ける　巻三⑥「鴻門会樊噲排闥」

◆鴻の水門の会　巻三⑥「鴻門会」

宴席で剣舞を装い頼朝を殺めんとする越後中太能景は、『源平盛衰記』巻三十五「木曽惜貴女遺」で切腹する、義仲の家臣である。一方、十六丁表の画面のみに登場する「越後忠次季光」は、『盛衰記』の同巻「東使戦木

曽」で、義仲方の劣勢を見て三条河原で自害した、「越後忠次家光」を借り来たったものであろう。同じく「越後」を称し、名乗りも「中太」と「忠次」であるからには、馬琴も両人の間に何らかの脈絡を想定していたと思われるが、本作の記述からは、この点が判然としない。

◆親良、義仲に従う　巻三⑦「范増奮激砕玉斗」

◆義仲、頼盛を面罵する　巻四①「項羽殺子嬰称覇王」

十九丁表に登場する、淡路冠者宗弘と二河左衛門尉頼致は、いずれも『源平盛衰記』巻三十五「木曽惜貴女遺」で討ち死にする、義仲方の武士である。

◆義仲、清盛の墓を暴く　巻四②「項羽封天下諸侯」

・下帙上（第三冊）

◆義仲、征夷大将軍となる　巻四①「項羽殺」・②「項羽封」

◆頼朝、帰国を画策する　巻四③「陳平定計救漢王」

◆頼朝、帰国する　巻四④「張良焼蜀桟道」

◆成経の死　巻四④「張良焼」

◆親良、童歌を広める　巻四⑤「項羽拒諫烹韓生」

二十六丁表の画面で、聯に記された「蝶鳥の糧千両也小米花」の句は、馬琴の亡兄興旨（俳号羅文）の詠である。この句は、同人の一周忌追善集『笠の露』（寛政十一年。早大図書館曲亭叢書所収）に掲げられた、「東岡舎遺稿四季吟抜萃三十八句」にも選ばれている。

◆鍔田忠政の切腹　巻四⑤「項羽拒諫」

二十七丁裏の詞書に言及された、忠政の死に関する「『盛衰記』の筋」とは、同書巻三十五「木曽惜貴女遺」における、「加賀国住人津波田三郎」の憤死を指す。この津波田三郎は、「松殿殿下基房公ノ御娘」（本作の山吹姫）との別れを惜しむ義仲に業を煮やし、既述の越後中大能景に続けて切腹して果てた。

原作の韓生が「油鑊ニテ烹殺」されるのに対して、忠政は主君義仲から切腹を命じられているが、この点について義経は、「いとありがたき、我が国風のいたす所」（二十八丁表詞書）と評している。このような馬琴の「皇国意識」は、本作と並行して執筆された『金毘羅船

利生纜』（『西遊記』の翻案。文政七年～天保二年、甘泉堂刊）の中に、とりわけ顕著なものである。神国日本の優位性は『利生纜』に限らず、馬琴の翻案合巻執筆を支えた認識であったと考えてよいだろう。

◆親良、義経を説く　巻四⑥「張良売剣説韓信」

親良が奥九郎（義経の変名）に与えた「膝丸」を含む源氏の名剣については、読本『昔語質屋庫』（文化七年十一月、文金堂等刊）巻一「第二　友切丸」に、馬琴の考証が見える。

◆頼盛の後悔　巻五①「項羽江中弑義帝」

・下帙下（第四冊）

◆頼盛、行家に討たれる　巻五①「項羽江中」

義仲が平頼盛の「警護の頭人」（三十二丁表）とした山鳥七郎俊義、ならびに俊義を殺害して単身脱出し、主君頼盛の首を越後で葬った弥平兵衛宗清については、原作『漢楚軍談』には対応する人物が登場しない。

「山鳥俊義」という名前から想起されるのは、馬琴が『水滸伝』の盧俊義に見出した「名詮自性」の説である。天罡星第二員なる、玉麒麟盧俊義は、美貌第一の漢なり。（中略）鵁鶄は山鶏なり。彼盧俊義は、鵁鶄の鳥を省て、人を添たる歟。この姓名により、後に溺死させしなるべし。（割注略）何となれば、山鶏は、おのが影を愛して、溺死するものなればなり。晋張華『博物志』云、「山鶏有二美毛一、自愛二其色一。終日映レ水、（割注略）目眩則溺死。」是なり。〔鵁鶄の山鶏なるよしは、『南越志』に出たり。劉向『説苑』、弁物篇、「猟食二鵁鶄一、鵁鶄食レ豹」。纂註に、『正字通』を引て、鵁鶄似二山鶏一而小、即錦鶏也」といへり。『本草綱目』に拠れば、山鶏・錦鶏通じて一とす。いまだ孰が是なるをしらず。（中略）〕又浪子燕青は、盧俊義が家僕なり。『博物志』云、「人食二鷰肉一【左ルビ「ツバメ」】不レ可レ入レ水。為二蚊龍所レ呑。」といへり。これに縁らば、盧俊義が江に落て死したるは、燕青を服従せし、此亦名詮自性といふべし。これらの趣向、尤妙なり。

（『玄同放言』巻三之下、十三丁）

馬琴は梁山泊第二位の盧俊義の名を、山鳥「鵁鶄」に通じるものと考え、淮河に落ちて溺死するという同人の最期を、『博物誌』の記述に関連付けて解釈した。このような理解を敷衍すれば、浪子燕青（梁山泊第三十六位）を家僕としたことも、盧俊義にとっては不運の予兆であったと見なしうるのである。

『漢楚賽』の山鳥俊義は、馬琴得意の自説を趣向化した人物と思しく、三十一丁表に見える宗清の詞書「水に溺る、山鳥の、譬に洩れぬ七郎俊義」も、右引用を参照することによって、初めて理解しうるものといえよう。

なお、同じ詞書において、宗清がこの一段を「作意の専文」と称していることには、本編の自序にもあるごとく、義仲に「弑逆」を行わせなかった自身の用心を、読者に誇る意図が存した。原作を正しく踏まえるならば、この局面で殺害されるのは、義仲自身が推戴した信濃宮（以仁王の王子）でなければならない。しかし馬琴は、義仲の「はじめの忠義」、すなわち信濃宮への忠勤を重く見て、淀川で落命する貴人を、池大納言頼盛に改めたのである。

三十三丁表には、頼盛の墓が越後に存するという、丸山元純『越後名寄』（宝暦六年成立）の記事が紹介されている。同書の巻五後「池殿館」項によると、同国蒲原郡中之島に頼盛の居館跡があり、「屋敷ノ内戌亥ノ方」の祠には、同人の木像が安置されていたという(＊3)。『越後名寄』には宗清の名前は見えないので、同人が頼盛の首を越後まで携行したとするのは、馬琴の創作と思われる。その基づくところは、宗清を「池殿ニハ相伝専一ノ者」（巻四十一「頼盛関東下向」）とする『源平盛衰記』の記述であろうが、一人生き長らえて頼盛を葬るという宗清の行動には、浄瑠璃『一谷嫩軍記』（宝暦元年初演）からの影響が想定できるかも知れない。

◆義経、義仲のもとを去る　巻五②「韓信背楚逃咸陽」

◆義仲、都へ移る　巻五②「韓信背楚」

◆義経、鎌倉へ向かう　巻五②「韓信背楚」

◆義経、木樵を殺める　巻五③「韓信問道殺樵夫」

◆義経、忠信と邂逅する　巻五③「韓信問道」

忠信の母が信夫庄司の側女で、その故郷を箱根塔ノ沢とする（三十七丁表）のは、本作の虚構のようである。

◆義経、鎌倉に至る　巻五③「韓信問道」

終盤に見える和田義盛（蕭何）と大江広元（夏侯嬰）との対談は、『漢楚軍談』巻五④「蕭何深奇韓信才」の冒頭部分を翻案したものである。

末尾部分で紹介された、本作起稿のいきさつについては、拙稿「墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（一）」（本誌第五〇四号。平成27年）の「はじめに」を参照されたい。

《注》

＊1　九月三日の日記に「漢楚賽三編三之巻五丁、書画不残、今日昼後、稿了」とあるが（『曲亭馬琴日記』第二巻、一七〇頁）、前日にも巻三稿了の旨が記されている。よって三日の記事は、「四之巻五丁」の誤りと思われる。

＊2　この初編後修本を、稿者は上帙二冊しか目睹しておらず（慶大図書館蔵本、福井市立図書館蔵本）、残る下帙が刊行されたのかは不明である。

＊3　越佐叢書第15巻（昭和53年、野島出版）、一一九頁。なお頼盛の祠は、長岡市中之島に「池公社」として現存する。

○付記

今回で、『漢楚賽擬選軍談』全三編の翻刻紹介を終了する。本稿（三）の末尾でも記したように、これで二十年近く抱え続けてきた宿題に、ひとまずの区切りをつけることができた。

本来であれば、現存する袋（筒型の包み紙）や、後修本『源平和漢染分（げんぺいわかんのそめわけ）』、あるいは先行する馬琴読本との関連などにも言及すべきであるが、これらについては別の機会を期することとしたい。

（かんだ・まさゆき　法学部准教授）